

## アンドレ・シャルロの『こちらロンドン！』

### ーイギリス1920年代のレビューに関する覚え書きー

赤 井 朋 子

- I. レビューについて
  - II. 『こちらロンドン！』について
  - III. レビューの創作について
  - IV. 作品の構成と内容
  - V. 上演舞台についての評価
- 参考文献リスト

#### I. レビューについて

レビュー (revue) とは演劇の一つの形態で、通常は歌とダンスと喜劇的な  
スケッチ 寸劇から構成されるものを意味する。フランス語の「revue (ルヴュ)」は「再び見る、再検討する」を意味する *revoir* の派生語であるが、元来フランスでは、一年の出来事を振り返る時事的なショーをルヴュと呼んでいた。ヴィクトリア朝初期のロンドンにも同種の娯楽が存在したと言われる。

19世紀後半になるとルヴュという語は、パリで流行したグラン・スペクタクルにも使われるようになり、エキゾチックな舞台装置やダンサーの脚線美など観客の視覚に訴えるステージを意味するようになっていく。この系統の舞台はアメリカでも流行し、ジークフェルド・フォリーズのようにスケールの大きい

---

\*2010年2月8日受理。

エンターテインメントへと発展していった。

スペクタクル性の高いパリ風のレビューは、このように他国においても流行したが、その一方で、本来のルヴュの伝統に近いもの、つまり風刺をきかせた時事的な内容の舞台も存続した。そして、フランスだけではなくそれ以外の国々においても、それぞれ独自の発展を見せていった。特にドイツにおいては、両大戦間期の「キャバレー」に包摂されたり、レビュー形式がアヴァンギャルド演劇に活用されたりしている。

イギリスの場合も、20世紀前半にレビューが大流行した。1890年代にすでにその種の作品が上演されていたと言われるが、本格的にレビューが流行し始めるのはアルベール・ド・クルヴィル（Albert de Courville）が『ハロー、ラグタイム！（Hullo, Ragtime!）』を上演した1912年以後であると言われる。特に第一次大戦中（1914～18年）から終戦直後にかけては、フランスのレビューが多く移入され上演された。

1920年代になるとイギリスのレビューも独自の変化を見せ始めるようになる。例えば、コンティニウム社の『20世紀演劇案内（The Continuum Companion to Twentieth Century Theatre）』の「レビュー（revue）」の欄には次のような記述がある。

1920年代にはイギリスに特有の様式が、もっと具体的に言うならロンドン風のレビューが、出現した。そして、主なプロデューサーはC・B・コ克蘭とフランス人のアンドレ・シャルロだった。彼らは二人とも、イギリスの作家や作曲家、俳優達を大勢、世に送り出すのに貢献した。例えば、ノエル・カワードやガートルード・ロレンスやベアトリス・リリー等である（Bordman 645. 下線は筆者による。以後も引用文中の下線はすべて筆者によるものである）。

また、エドモンド・ホワイトハウス (Edmund Whitehouse) 編『ロンドンの灯—ウエスト・エンド・ミュージカルの歴史 (London Lights: A History of West End Musicals)』の1920年代を扱った章では、外国の影響を大きく受けながらもイギリス本国のアーティスト達が目覚ましい活躍を見せた点が強調されている(25)。どうやらこの時代は、音楽劇の分野がヨーロッパ大陸やアメリカから多くを移入して目まぐるしく変化しながらも、イギリス国内の新しい才能により自らのオリジナリティを見いだしていった時代であったと言えるであろう。

本稿では、1920年代前半の代表的なレビューの一つとして、上の引用文にも記載のあるアンドレ・シャルロ (André Charlot) のプロデュースした『こちらロンドン! (London Calling!)』をとりあげ、この作品についての情報や言説をいくつか挙げていこうと思う。そして、この時期にレビューがどのように変化をし、それがどのような意味を持っていたかを探るきっかけにしたい。

レビューというジャンルについては、少なくともイギリスに関しては、今のところそれほど研究されているとは言えず、特定の時代や場所における特徴もまだ精査されていない。レビューという言葉じたい、他の類似のジャンル、例えばヴァラエティやミュージックホール、ヴォードヴィルやミュージカルといった語と大して区別なく用いられることもあるのが現状のようである。まずは一つの代表的な作品をとりあげて、その内容を確認し、それについての言説などを集めてみるのも意義あることであろう。

レビューは、ストレート・プレイのように戯曲を読むことでおよその全体像がつかめるものではない。再演はほとんど不可能とされる形式の演劇である。ストレートプレイが単行本の小説であるならば、レビューは読み捨てられるファッション雑誌のようであるとも言われるが、ローカルでタイムリーな事柄に言及した過去のレビュー作品は、やはり決して理解しやすいものとは言えないだろう。

しかし、作品に関する具体的な情報がある程度集めることにより、いくらか

上演当時の様子を窺い知ることができる。レビューはストレート・プレイと比較すると、言葉が少なく、音楽やダンス、美術を含む総合芸術に近い形式をとっている分、演劇人への国際交流が容易な分野であったと言える。レビューの黄金時代と呼ばれたこの時期のロンドンのレビューは、当時のウエストエンドの演劇状況、特にその後のミュージカルの発展を準備した演劇状況を知るには、もしかしたら情報が満載された世界なのかも知れない。

## Ⅱ. 『こちらロンドン！』について

『こちらロンドン！』は、1923年9月4日にアンドレ・シャルロ<sup>1</sup>がデューク・オブ・ヨークス劇場（Duke of York's Theatre）で初演したレビューで、1924年5月10日までの間に合計316回の公演が行われた。

台本はノエル・カワード（Noël Coward）<sup>2</sup>とロナルド・ジーンズ（Ronald Jeans）<sup>3</sup>の共作。作詞・作曲は主にノエル・カワード。ただし、作曲をフィリップ・ブラーム（Philip Braham）やユービー・ブレイク（Eubie Blake）が、作詞をノウブル・シスル（Noble Sissle）が担当したものもある。衣装はエドワード・モリス（Edward Molyneux）、舞台美術はマルク・アンリ（Marc Henri）とラヴェルデ（Laverdet）、オーケストラの指揮はフィリップ・ブラームであった。

主なキャストは、ノエル・カワード、ガートルード・ロレンス（Gertrude Lawrence）、メイジー・ゲイ（Maisie Gay）、アイリーン・モリス（Eileen Molyneux）、タビー・エドリン（Tubby Edlin）であった。

このレビューはカワードが台本を書いた最初の音楽劇として知られている。また、ガートルード・ロレンスが歌った「パリのピエロ（Parisian Pierro）」がカワードにとって最初のヒット曲となり、その後もカワードの持ち歌になった。

この時にカワードとロレンスが共演したことは、ジェイムズ・ロス・ムア（James Ross Moore）が述べているように、演劇史的にも意義のあることだった。

このレビューは演劇の歴史を作った。『こちらロンドン！』はカワードとロレンスが初めて共演した作品で、二人が音楽劇における最も有名なコンビの一组になることを予示していた。あの気まぐれなロレンスもカワードのスケッチの住人になる時だけは非の打ち所がなかったし、このペアと一緒に演技する時には反語的な冷静さを見せていたが、これはその後少なくとも20年間は英米の舞台を支配することになるある様式<sup>スタイル</sup>を創り出したのである（77）。

### Ⅲ. レビューの創作について

1971年に刊行された『レビュー：写真で読む物語 (Revue: A Story in Picture)』に、晩年のノエル・カワードが序文を書いているが、ちょうど『こちらロンドン！』創作時のことに触れているので、ここに抜粋しておく。特に、レビューの特徴を理解するのに参考になる。

私は1923年に『こちらロンドン！』を書き、それに出演した時、アンドレ・シャルロから、あの恐ろしい化け物である「演目の順序 (Running Order)」、つまり、レビューのあの限りなく魅力的で本質的でもある側面について、初めて学ばせてもらった。彼は、レビューの中の全ての演目<sup>ナンバー</sup>の名前をカード一枚一枚に書き込み、それらを机の上に並べた。そして、ペイシェンス〔トランプ一人占い〕でもするかのように、手際よくカードの位置を変えたり動かしたり、とにかく、正しい順序になったと彼が満足できるまで、何度も何度もカードを移動させるのだった。例えば、前半部の最後のナンバーがすでに問題なく決定されたとしても、そのフィナーレに向かう全てのナンバーが、しだいに強度を増していく——特にフィナーレの「一つ前の」ナンバーに向かって、盛り上がっていくものでなければな

らなかった。そして、その「一つ前の」ナンバーは、それがどんなものであれ、間違いなく当たるものでなければならなかったのである。また、今も昔も変わらずそうであるが、後半部の2番目のナンバーはきわめて重要である。非常に力強い、か、可笑しい、あるいは華麗なものを持ってこななければならない。それがうまく行けば、観客は——中にはバーから遅れ気味に戻ってくる者もいるだろう——後半部が前半部よりさらに素晴らしい舞台になりそうだと思います、幸せな気分です席に居心地よく落ち着けるのである。

こういったことは全て、カードの上だからこそ極めて平和に物事が片づく。なぜなら、その次に可笑しいことが始まるからだ。「この舞台装置からすぐあの舞台装置に切り替えるのはどう考えても無理ですよ。」「いくらガーティ〔ガートルード・ロレンス〕でも、寸劇が終わった途端にツイードのスーツからイブニングドレスに着替えて、すぐその後に続く彼女のビッグ・ナンバーを演じ始めることは、とうてい不可能です」といった具合に。そうしてさらにカードの手品ジャグリングが続き、最後には全てがうまく落ちて、スムーズに進行できるようになるのだ (vii-viii)。

ここには、レビューが断片の寄せ集めではないこと、そしてそれ故に、全体をコーディネートする類いまれな才能を必要としていることが指摘されている。その上で、カワードは優れたレビューの条件を次のように記している。

第1に、優れた素材——歌、スケッチ寸劇、ダンス。それから、幸運にも見つければ、スター、もしくはスターの個性パーソナリティ。そして、演出家の趣味と気配りと粘り強い忍耐力。最後に忘れてならないのが、演目の適切な順番である (viii)。

#### IV. 作品の構成と内容

レイモンド・マンダー (Raymond Mander) とジョー・ミッチンソン (Joe Mitchenson) の共同編纂による『カワード演劇に関する手引き (Theatrical Companion to Coward)』に、『こちらロンドン!』の場面構成が掲載されている。それによるとこのレビューは全体が第1部と第2部に分かれ、第1部が12のナンバー、第2部が13のナンバーから構成されていたことがわかる<sup>4</sup>。間に1度休憩を入れて、合計25のナンバーが上演されたわけである。時間的には3時間余りであったようだ。

この章では、各ナンバーのタイトルとその解説を記していく。解説を書く際には、本稿の末尾に記した複数の文献と資料を参考にした。特に歌に関しては、「パリのピエロ」のようにヒット曲として録音されCDになっているものもあれば、楽譜も歌詞もともに残っていないものもあり、情報が乏しいもの、不明のものもあることをあらかじめ断っておく。

また、スケッチの場合は作者を記してあるが、歌の場合は特に記載がなければノエル・カワードの作詞・作曲によるものである。

ちなみに、ダンスの振付けについては、その一部をアメリカ人のフレッド・アステア (Fred Astaire) が担当している。(アステアは『ストップ・フラーティング (Stop Flirting)』出演のためにちょうどロンドンに滞在中だったようである。) ダンスの振付けを行った人物の名前は他にも文献を読むと出てくるが、初演当時のチラシと思われる資料 (写真1) には、舞台美術や衣装、音楽の担当

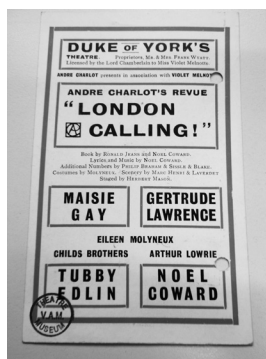


写真1 『こちらロンドン!』初演時のチラシ (V & A Theatre Collections)

者についての記載はあるものの、ダンスについては特に記載されていないことがわかる。

## 第1部

### 1. 「上品に始めましょう」(ロナルド・ジーンズ、ノエル・カワード作)

主演俳優たちが勢揃いするオープニング・コーラス(メイジー・ゲイ、ガートルード・ロレンス、タビー・エドリン、ノエル・カワード、アイリーン・モリス、アーサー・ロウリー)。デューク・オブ・ヨークス劇場のように品位のある劇場でレビューを上演する大胆不敵さを観客に詫げる内容。

このナンバーは、台詞だけの客間喜劇で始まるが、舞台上の俳優の数が増えるに連れて、しだいに音楽の占める割合も増えていき、最後には壮大なオープニング・コーラスへと発展する。

### 2. 「遺産相続の見込み」 スケッチ(ロナルド・ジーンズ作)

株の仲買人のモンタギュー(ノエル・カワード)は、未来の義理の父に良い印象を与えようと、仕事がかうまくいっているかのように装い、法螺話ばかりする。しかし、義理の父だと思って喋っていた相手は実は税務署の役人だったのだ。

### 3. 「タマリスクの町」 歌

ガートルード・ロレンスとコーラス。海の向こうの島、タマリスクの町に住む乙女は、島を去った恋人の帰りを待っているという内容。低く囁くような歌い方(クルーン唱法)

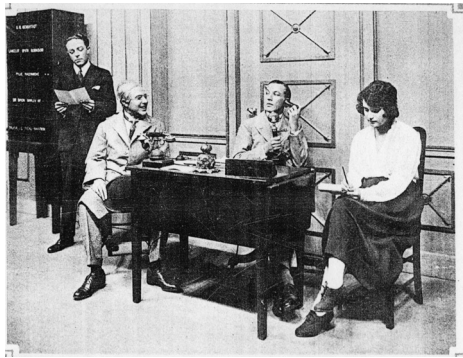


写真2 「遺産相続の見込み」  
(The Sketch, 26 Sept. 1923)

で歌っている。

「衣装の色、舞台全体の演出が魅力的」(The Stage) とされたナンバー。タマリスクとは、主に地中海やアジア地域に生息する低木のことで、桃色や白色の花をつける。



写真3 「タマリスクの町」  
(The Sketch, 19 Sept. 1923)

#### 4. 「デヴォン」 歌

タビー・エドリンのソロ。沈んだメロディと陽気なりフレインからなる典型的なデヴォンの歌謡を、<sup>バラッド</sup>はにかみながら歌おうとするところが滑稽。

#### 5. 「救いの天使」 スケッチ (ロナルド・ジーンズ作)

コメディエンヌのメイジー・ゲイが新米の看護婦を演じる。彼女の荒っぽい扱いで、気の毒な患者は天井近くまで飛び上がる。

#### 6. 「他の女の子たち」 歌

ノエル・カワードとコーラスによるバラッド風の歌。無垢な彼女のために他の女の子たちとは別れましょう、という内容。



写真4 「他の女の子たち」 (Mander, Revue)

## 7. 「最後の仕上げ」 スケッチ（ロナルド・ジーンズ、タビー・エドリン作）

アーサー・ロウリーとタビー・エドリンが出演。サマークルーズ卿（ロウリー）は自殺しようと試みるが、光熱費も払えないほど貧しいので、途中でガスが止められてしまう。

「他のナンバーのレベルが非常に高いので見劣りする。」（*The Times*）

## 8. 「7時前の雨」 スケッチ

ノエル・カワードとガートルード・ロレンスの二人芝居。プラトニックな新婚旅行をカリカチュア風にアイロニックに描く。後の『私生活』（カワード作）におけるエリオットとアマンダを彷彿させるところがある。ここでは、ほんの口げんか程度ではあるが、お互いに好きであるからこそ衝突しあう関係というものが描かれている。また、新婚夫婦なのに、シニカルなことも（特に結婚について）口にする。

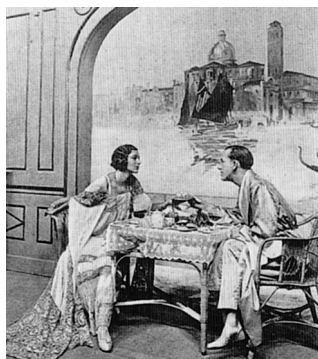


写真5 「7時前の雨」  
（Mander, *Companion*）

「才氣に富んではいるが、やや不快感を与えるスケッチだ。（*The Times*）」

## 9. 「私の船が戻ってきたら」 歌

ウィニフレッド・サッチェルが未来に期待を寄せるタイピストの少女の歌を歌う。シンプルではあるが旋律の美しい歌。

## 10. 「老婦人の言うことは支離滅裂」 スケッチ（ロナルド・ジーンズ作）

流行語を使おうとして言い間違いばかりする婦人（メイジー・ゲイ）の滑稽なスケッチ。

#### 11. 「キャリアは注意深い女の子だった」 歌

ガートルード・ロレンスのソロによる、ミュージック・ホール・タイプのレビュー・ソング。真面目なふりをする、悪戯好きの女の子の歌で、歌詞にはダブル・アンタンドル二重の意味がある。この時代にすればやや大胆な歌だったかも知れないが、評判は良かった。

#### 12. 「リトル・バギー・マギー」 歌

『リトル・ネリー・ケリー (Little Nellie Kelly)』のパロディ。『リトル・ネリー・ケリー』は、アメリカ人ジョージ・M・コーハン (George M. Cohan, 1878～1942年) 作の音楽劇で、『こちらロンドン!』の初演と同じ1923年に、シャルロのライバルでもあったチャールズ・コ克蘭 (Charles Cochran, 1872～1951年) がニュー・オックスフォード劇場で上演していたもの。

### 第2部

#### 13. 「年増の女にもまだ人生はある」 歌

メイジー・ゲイがコーラスとともに、<sup>スプレット</sup>疲れた小間使いの歌を歌う。

#### 14. 「<sup>アーリー・モーニング</sup>早すぎた哀悼」 スケッチ

スケッチの大半がガートルード・ロレンスのモノローグ (電話の会話) となっており、彼女の<sup>トゥール・ド・フォース</sup>巧みな演技が賞賛されたナンバー。夫がウォータールー・ブリッジから飛び降りて自殺したという恐ろしい知らせを受けたポピー・ベーカーは、早速友人たちや愛人に電話をかけ、食事の約束をするが、しばらく後に、実は先ほどの

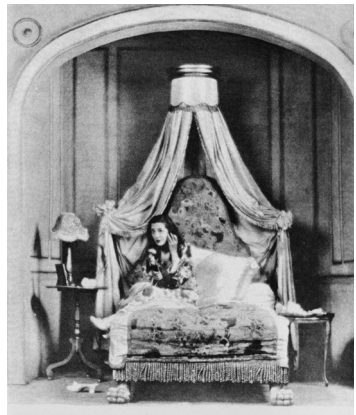


写真6 「早すぎた哀悼」  
(Mander, Revue)

連絡は人違いでボピーの夫は自殺などしていなかったという知らせ（彼女にとっては最初の知らせよりもっと恐ろしい）を受ける。

前述したように、シャルロは後半部2番目のナンバーを特に重視していた。後半2番目のナンバーがうまく行けば、観客は満足した気分で残りの舞台を見ることになるというのが理由であったが、このスケッチがそれにあたる。レビューの成功を左右する重要なナンバーである。（さらに詳しいスケッチの内容を後に記す。）

15. 「こちらロンドン」 スケッチ（ロナルド・ジーンズ作）

16. 「ロシアン・ブルー」 歌

亡命したロシア人の歌をカワードとコーラスが歌う。エドワード・モリスがロシア・バレエ風の衣装をデザインし、ラディ・クリフがダンスを振り付けた<sup>5</sup>。

17. 「恋の骨折り」 スケッチ（ロナルド・ジーンズ）

ガートルード・ロレンスとタビー・エドリンが主演するスケッチ。

18. 「<sup>ブルネ・ギヤルド</sup>気をつけなさい、リゼット」 歌

メイジー・ゲイとコーラス。「<sup>ボワルー</sup>フランス兵」を軽蔑し将官たちを歓迎する、フランス人の抜け目のない少女の歌。

19. 「あなたは私のもの」 歌とダンス（シスル作詞、ブレイク作曲、フレッド・アステア振付）

ガートルード・ロレンスとノエル・カワードによるデュエット。

20. 「スイスのウィトルボット一家」 スケッチ

奇を衒ったことをしたり、もっともらしい口調でナンセンスなことを言ったりする現代詩人を風刺したスケッチ。ハーニア・ウィトルボット嬢（メイジー・ゲイ）は伴奏に合わせて「難解」な詩を朗読する。このスケッチの大半はその詩である。（実在した



写真7 「スイスのウィトルボット一家」  
(Mander, *Revue*)

シットウェル一家のバーレスクと見られる。実際カワードはオズバート・シットウェルから抗議の手紙を受け取ったらしい。) ハーニア役のメイジー・ゲイの演技が評判だったようだ。

21. 「感傷」 歌とダンス（ノエル・カワード作詞、フィリップ・ブラーム作曲、フレッド・アステア振付）

カワードがソロで歌とダンスを披露したナンバー。燕尾服にシルクハット、そしてステッキを持って。



写真8 「パリのピエロ」  
(Castle)

22. 「パリのピエロ」 歌

ガートルード・ロレンスがブドワール・ドール（婦人の寝室のベッドに飾られたアール・デコ風の人形）に扮して「パリのピエロ」をせつなく歌う。衣装はエドワード・モリスのデザイン。『こちらロンドン！』の中でも

特に評判の良かったナンバー。

23. 「雰囲気のあるドラマ」 スケッチ（ロナルド・ジーン作）

タビー・エドリンを中心とするスケッチ。

「他のナンバーのレベルが非常に高いので見劣りする。」（*The Times*）

24. 「愛が意味するもの」 歌

メイジー・ゲイがギャンプ夫人（ディッケンズの『マーティン・チャズルウィット』に登場する酒好きの太ったコックニー）のようなタイプの好色な女を演じる。

メイジー・ゲイによるこの歌は、カワードがこの作品中最もヒットしたナンバーであると回想している。

25. 「星を追って」 歌

ガートルード・ロレンスが中心となった最後のナンバー。1924年の初め頃からは、『リトル・バギー・マギー』が最後のナンバーとして使われることになる。

**\* スケッチ「早すぎた哀悼」のあらすじ**

ポピー・ベイカーの寝室。ポピーは電話の音で起こされる。電話の主はプリングル氏という人らしい。彼女はわざとコックニー（ロンドン下町訛り）のアクセントで話すことにより、女中のふりをし、ミス・ベイカーは不在だと答える（独身を装っているらしい）。

再び電話が鳴る。今度はマギーという友人からだ。彼女は声の調子と話し方を先ほどとは変えて、マギーとおしゃべりをする。マギーは離婚裁判を行っているところらしく、ポピーもあっけらかんと離婚裁判についてのおしゃべりを楽しむ。ポピーは夫とはもう5年も会っていないというが、夫には離婚する意

思がないらしい。そして、夫にも彼女にもそれぞれ愛人がいるらしい。

また電話が鳴る。今度は警察かららしく、ポピーは恐ろしい知らせを受けたらしい。

電話を切った後、しばらくぼんやりし、ハンカチで目頭を押さえたりもするが、やがて思い出したように、電話をかける。

最初はクラリッジズ（ロンドンの高級ホテル）に居るファンショー夫人（さきほどのマギーのこと）、それからフロッシー、ヴァイオレットと友人達に次々に電話をかけ、夫のジムが昨夜ウォータールー・ブリッジから川に飛び込んで溺死したと伝え、お昼に会うことを約束する。

次に愛人のボビーに電話をして夫の死を伝える。とてもショックでみじめな気持ちよ、と言いながらも今晚会う約束をする。

最後にブリクストン（！）にいる母親に電話をかける。（電話をとりついだ人にはミス・ペイカーと彼女は名乗る。）母親にもジムの死を伝え、お昼の約束をする。

メイドのリリーを呼ぶと、リリーはめそめそ泣いている。どうしたのか尋ねると、上の階のストレイカー夫人のところに、御主人が昨夜ウォータールー・ブリッジから飛び降りたという通知が届いたらしく、お気の毒だというのである。

ちょうどその時に、電話が鳴る。受話器を取って相手の話を聞いたポピーは、電話器を床に投げつけながら、「ご面倒をおかけしましたね！」と一言。（暗転）

## V. 上演舞台についての評価

『こちらロンドン！』の上演に関する文章を、主に劇評からいくつか抜粋して以下に示す。いずれも初演当時のものである。

(1) ミュージック・ホールとの違いや『こちらロンドン!』の新しさを指摘する例

現代のレビューはミュージック・ホールの「演し物」を不釣り合いに寄せ集めただけのものにすぎないと主張してやまない皮肉屋の人達は、一度デューク・オヴ・ヨークス劇場に出向いて、シャルロ氏の新作『こちらロンドン!』を見るべきである。確かにこの作品は、他のレビューのように、互いに全く無関係な出来事を繋ぎあわせただけのものかも知れない。その限りにおいて、上の定義は正しいと言えるだろう。しかし、この作品とミュージック・ホールとの間には、大きな相違点が2つある（1つは、すべてのレビューに共通しており、もう1つは、この作品と他のごくわずかのレビューに当てはまるものである。）まず1点目は、ミュージック・ホールの場合、「スター」は自分に充てられた時間、演技を行った後、経験の少ない他の芸人達に舞台を譲るのがふつうであるが、レビューのスター達は、一度退場しても必ず舞台に再登場することである。2点目は、『こちらロンドン!』の場合、それぞれの演目が互いに少しも似ていないように見える時でさえ、すべてに、同じ特徴の機知かあるいは美しさが刻印されていることである（The Times）。

優れたレビューというのは優れた劇と同じぐらいに珍しい。というのも、レビューを組み立てるのにある種の才能を必要とするからだ。レビューはミュージック・ホールの演し物をただ数珠つなぎにして3時間ぐらいに引き延ばしただけのものではない。レビューの場合、その首飾りの紐には趣味のよいものが選ばれ、真珠のようにメロディと愉快さが組み合わされ、そしてそのデザイナーの特徴を持つ エンターテインメント 娯楽 という首飾りが留め金によってしっかりとつながれているのである。このことはまさに『こちらロンドン』にあてはまる。作品内のナンバーとナンバーの間にどれだ

け差異や多様性があったとしても、私たちは機知と美しさの向こう側に、統一された何ものかを感じ取るのである。タンベリー・クラムジー卿〔太鼓腹の不器用さん〕が舞台上を歩き回ることはないのだ。機知には切れがあり、ユーモアは繊細で、風刺はぴりっとしている。そして、思わず笑いが生じるのである（Grein）。

長年の間、批評家たちはこう不平をこぼしてきた。レビューを上演する人たちは <sup>ウィット</sup> 鬻<sup>ウィット</sup> には注意を払っても機知には頑として目もくれない、と。俳優の頭に被せるものについては熱を上げるのに、作者の知性にまとわせるものには無関心だと言うのである。しかし最近、変化の兆しが見え始めた。アンドレ・シャルロ氏は、最近の冒険的な興行においてノエル・カワード氏を使うことにより、知識人の中でも最も若い世代の人達——若いからと言って知的ではないと誰に言えようか——に印象を与えている。（中略）

レビューを軽蔑する理由は全くない。レビューは現代人の気質から生み出されたもので、古代ギリシャ人の考え方からギリシャ劇が生まれ、説教を望む気持ちから道徳劇が生まれたのと同じである。レビューは時代に適合したものである。演劇芸術のこの形式を鼻で笑う者には鑑識眼がないと言える。『こちらロンドン！』は私が見た最高のレビューのうちの一つである（Agate, *Immoment* 132-33）。

レビューの愛好家にとっては少し才気煥発すぎることが、『こちらロンドン』の最大の長所になるかも知れない。例えば、シットウェル一家についてのスケッチ「スイスのウィトルボット一家」のようなナンパーは、知識人や通人には喜ばれるが、イーディス・シットウェル嬢と彼女の二人の兄弟、そして <sup>ジョージアン</sup> 当世風の詩への彼女らの貢献についておそらく何も聞いたことの無い多くの観衆にとっては、少し理解しがたいものであっただろう。

しかしながら、その如才のなさにもかかわらず、平凡になる時もあり——レヴューにはやむを得ないことである——、そのことで全体のバランスが取れていることも否定できない。『こちらロンドン』においてノエル・カワード氏とロナルド・ジーンズ氏は長年お目にかかったことのないような機知に富み楽しいレヴューを発表したと、敢えて危険を冒して述べたとしてもそれだけの価値がある（*The Illustrated London News*）。

## (2) 上演の長さについて

火曜の午後に行われたアンドレ・シャルロの新しいレヴューの初日公演は非常に長かった。そして、レヴューを構成するナンバーも25もあって多すぎるため、ここで詳しくコメントすることができない。5、6ナンバーほど削れば『こちらロンドン』は手に負える長さになるであろう。（中略）しかし、観客を魅了したこのレヴューの多くのナンバーは本当に才気に富んでいて楽しく、音楽は全体として魅力的で耳に心地よく、色彩効果の点でも美しいものがいくつかあった。パリから来たモリヌのデザインによる華麗で魅力的な衣装も多彩であった（*The Stage* 6 Sept. 1923: 16）<sup>6</sup>。

今のままだと少し長過ぎる。しかし、25のナンバーの中から容易に除外できるものもある。出来が悪いからではなく、他のナンバーのきわめて高いレベルに達していないからだ。まず、「最後の仕上げ」というスケッチと「7時前の雨」と呼ばれるスケッチ、（中略）それから「雰囲気のあるドラマ」と2～3の歌である。このようにいくらか凝縮させると、『こちらロンドン！』はシャルロ氏の上演した中でも最高のレヴューになるであろう。（*The Times*）

### (3) 初日の観客席の様子

昨日の午後の初日公演が終わった時には、この作品は熱烈な歓迎を受けた (The Times)。

『こちらロンドン』の初日にはあらゆる種類の男優や女優が集った。(中略)

グラデイス・クーパーがあるボックス席に、アイヴァー・ノヴェローが別のあるボックス席に座っていた。ノヴェロー氏は、公演中に6回、笑いすぎて椅子から転げ落ちそうになった。(中略)

夜の公演の時には、天井<sup>ザ・ギャラリー</sup>敷の観客が、特に後半部において、各ナンバーが終わる毎にブーイングをしたり野次をとばしたりしていた。邪魔が入り中断させられるナンバーもあったほどだ (Swaffer)。

### (4) 特に評判の良かったナンバー (カワード自身による回想)

このショーの中でもヒットしたのは、まず第1に、メイジーの歌う「私のような娘にとって愛が意味するもの」と、シットウェル一家についての軽いバーレスクで彼女が演じたハーニア・ウィトルボットである。次に拍手が多かったのは、ガーティ〔ガートルード・ロレンス〕の歌う「キャリーは注意深い女の子だった」と、ガーティと私が一緒に歌い、フレッド・アステアにアレンジしてもらったダンスを踊った「あなたは私のもの」というデュエットであった。

ガーティの歌った「パリのピエロ」は申し分なかった。エドワード・モリヌは舞台上にそれまで見たことがないほど美しい絵を創り上げた。そしてその次に評判が良かったのは、「年増の女にもまだ人生はある」を歌う疲れた小間使い<sup>スプレット</sup>役のメイジーである (Mander, *Companion* 80)。

(5) 俳優の演技について

ガートルード・ロレンス嬢は、演じる役が驚くほど多岐に渡っているにもかかわらず、どれも見事に演じている (The Times)。

この作品はレビューとしての機能をしっかり果たしている。つまり、人々の虚栄や自惚れを笑い飛ばすことにより酷評するという機能である。ガートルード・ロレンス嬢はまるで巧みなフェンシングの剣士のようにあざやかに突いてくる (Agate, *Immoment* 133)。

メイジー・ゲイ嬢は、いつもそうなのだが、彼女の触るものをほとんど何でもユーモアに変えてしまう (The Times)。

私は劇場に通うのを常としているので、そう簡単には感動しないのであるが、彼女〔メイジー・ゲイ〕がハーニア・ウィトルボットとしてあの聡明なパロディを朗唱した時には、さすがに大声で笑った。彼女はわざわざ見に行く価値のある演技を見せてくれる (Grein)。

タビー・エドリン氏は、彼の特徴的な調子にうまくはまった時にユーモアを発揮する。彼の多くの役も、彼がそこに落ち着いた時には実に面白いものになるだろう (The Times)。

タビー・エドリン氏は、最初のうちは早口のおしゃべりが面白かったが、上演が進行するうちに、その作意ある単調さ故に、やや飽きられる傾向があった (The Stage)。

複数の劇評において、レビューがミュージック・ホールのような大衆演芸と

は異なることが指摘されている。また、『こちらロンドン！』を見るとその両者の違いがよくわかるといったことも書かれている。レビューの再定義が、この作品をきっかけに試みられたと言えばよいだろうか。劇評家のエイガットが上の引用文で指摘しているように、ちょうどこの頃はこの作品を通して音楽劇の分野が変化の兆しを見せ始めた時期だったのかも知れない。

また、実際の上演の話になると、作品全体の統一性の問題とともに、やはり個々の俳優の演技の問題が重要な位置を占めてくる。『こちらロンドン！』に主演した俳優については、全体としてはどの批評家も高く評価しているが、中には否定的な評価もある。例えば、タビー・エドリンは大変人気のあった俳優であったが、彼に関する『ステージ』紙の評価を見ると、演技のマンネリズムが指摘されていることがわかる。『タイムズ』紙においても、批判ではないが、同様のことがほのめかされていると言える。『こちらロンドン！』上演時には、もしかしたら、彼の演技のスタイルはすでに古くなりかけていたのかも知れない。多芸多才が賞賛されたガートルード・ロレンスとは対照的である。

## 注

- <sup>1</sup> アンドレ・シャルロ（1882～1956年） パリ生まれのフランス人興行師。パリで劇場やミュージック・ホールの経営（例えば、フォーリー・ベルジュールやパレ・ロワイヤル劇場）に携わった後、1912年にロンドンのアルハンブラ劇場の共同経営者になり、そこでレビューの上演を成功させる。ロンドンでは、パリのグラン・レビュー風のものも上演したが、1916～23年にはヴォードビル劇場で一連のインティミット・レビューを上演している。1930年代には映画の仕事を行うため、カリフォルニアに移り住んでいる。
- <sup>2</sup> ノエル・カワード（1899～1973年） およそ演劇に関係のある仕事なら何でも手がけたと言えるほど様々な分野で才能を発揮し、特に1920年代～30年代のイギリスでは若い世代に支持されて一世を風靡した流行作家。日本では喜劇作家として有名で、『花粉熱（Hay Fever）』や『私生活（Private Lives）』、『陽気な幽霊（Blithe Spirits）』などが知られるが、ミュージカルやオペレッタ、レビューも何作か創作している。台本を書くだけではなく、作詞・

- 作曲もし、自ら俳優として出演し、ピアノを弾きながら歌を歌い、ダンスも踊った。
- 3 ロナルド・ジーンズ (1887～1973年) 劇作家。アンドレ・シャルロの代表的なレビュー『ブンブン (Buzz-Buzz)』(1918年) や『A から Z まで (A to Z)』(1921年) などの台本を担当し、寸劇を書いている。
  - 4 レヴューの中の一つひとつの演目をナンバー (number) と呼ぶ。ただし、この作品においては 'call' という語が用いられている。
  - 5 ラディ・クリフ (Laddie Cliff, 1891～1937年) はミュージックホールの芸人であったが、アメリカでしばらくフォリー・ベルジェールなどに出演した後、イギリスに戻りレビューに出演するようになった人である。
  - 6 アンドレ・シャルロは初日にマチネとソワレの二回公演を行ったが、マチネで始めるのは異例のことであった。

## 参考文献

- Agate, James. *The Contemporary Theatre*, 1923. London: Leonard Parsons, 1924.
- . *Immement Toys*. London: Jonathan Cape, 1945.
- Castle, Charles. *Noël*. London: W. H. Allen, 1972.
- Bordman, Gerald. "Revue." *The Continuum Companion to Twentieth Century Theatre*. Ed. Colin Chambers. London: Continuum, 2002.
- Citron, Stephen. *Noël & Cole: The Sophisticates*. 1992. Milwaukee: Hal Leonard, 2005.
- Coward, Noël. *Collected Revue Sketches and Parodies*. London: Methuen, 1999.
- . *Collected Sketches and Lyrics*. London: Hutchinson, [1931].
- . Foreword. *Revue: A Story in Pictures*. By Raymond Mander and Joe Mitchenson. London: Peter Davies, 1971.
- . *The Lyrics of Noël Coward*. 1965. London: Methuen, 1995.
- . *Present Indicative*. 1937. London: Methuen, 2004.
- Day, Barry, ed. *The Letters of Noël Coward*. London: Methuen, 2007.
- "The Duke of York's: 'London Calling.'" *Stage* 6 Sept. 1923: 16
- Grein, J. T. "London Calling." *Sketch* 12 Sept. 1923: 518.
- Hoare, Philip. *Noël Coward: A Biography*. New York: Simon & Schuster, 1995.
- "London Calling." *Sunday Express* 9 Sept. 1923: 4.
- "'London Calling': at the Duke of York's." *Illustrated London News* 15 Sept. 1923: 506.
- "'London Calling': New Revue at the Duke of York's." *Times* 5 Sept. 1923: 8.

- "'London Calling': Revue at the Duke of York's." *Era* 12 Sept. 1923: 7.
- Mander, Raymond, and Joe Mitchenson. *Revue: A Story in Pictures*. London: Peter Davies, 1971.
- , comp. *Theatrical Companion to Coward*. 1957. London: Oberon, 2000.
- Morley, Sheridan. *The Private Lives of Noël and Gertie*. London: Oberon, 1999. Rpt. of *A Talent to Amuse*. 1969. *A Bright Particular Star*. 1981.
- Moor, James Ross. *André Charlot: The Genius of Intimate Musical Revue*. Jefferson: McFarland, 2005.
- "Plays of the Moment: No. LXXVI: 'London Calling.'" *Sketch* 19 Sept. 1923: 566.
- "Plays of the Moment: No. LXXVIa: 'London Calling.'" *Sketch* 26 Sept. 1923: 620.
- Short, Ernest. *Sixty Years of Theatre*. London: Eyre & Spottiswoode, 1951.
- Swaffer, Hannen. "'London Calling' Booed—and Cheered." *Daily Graphic* 6 Sept. 1923: 13.
- Whitehouse, Edmund, comp. *London Lights: A History of West End Musicals*. Cheltenham: This England Books, 2005.

## その他の参考資料

- "Duke of York's: London Calling." V & A Theatre & Performance Collection. Blythe House. London.
- Julie Andrews "Star."* Dir. Robert Wise. Perf. Julie Andrews, Daniel Massey. Twentieth Century Fox, 1968.
- "The Noel Coward Music Index."  
<http://www.noelcoward.net/ncmiindex/ncmi.html>

## 付記

本稿は、日本学術振興会2009年度科学研究費補助金〈基盤研究(C)〉「両大戦間期ロンドンにおけるレビューを中心としたウエストエンド商業演劇に関する研究」による研究成果の一部である。